

戦時旅行靴

——金博士シリーズ・6——

海野十三

青空文庫

大上海だいシャンハイの地下を二百メートル下つた地底ちていに、宇宙線をさけて生活している例の変り者の大科学者金博士きんはかせのことは、かねて読者もお聞き及びであろう。

かの博士が、今日までに発明した超新兵器のかずかずは、文字どおり枚拳まいきよに違いとまあらず、読者の知って居られるものだけでも十や二十はあるであろう。その超新兵器は、発明されて世の中に出る毎ごとに、何かしら恐ろしき騒さわぎをひきおこし、気の弱い連中を毎

回氣絶させている次第であつた。

中でも、かの依いぞん存き梟雄ようゆうの醬しょう買かい石せき委員長は、同じ民族なる金博士の発明兵器による被害甚大で、そのためにこれまで幾度いのち生命を落しかけたか知れず、醬しょうの金博士を恨うらむことは、居お谷い岩い子女わ史さんが伊い右え衛もん門もんどのを恨うらむ比ひなどに非あららず、可愛あままつて憎にくさが十の十幾倍という次第であつた。

「えいくそ。この上はなんとかして、わが息のあるうちに、かの金博士めの息の根を止めてくれねば……」

というわけで、今や醬しょう買かい石せきは、執しゅう念ねんの火の玉と化かし、喰くうか喰くわれるかの公算五十パーセントの危険をおかしても一いっ矢しをむくわで置くべきかと、あわれいじらしきことと相あ成いつた。

さて、対金方針は確定した。さらばこの上は、如何なる手段によつて、彼でか頭の金博士を抉り殺してしまふべきか。

醬は、幹部を某所に集めて、秘密會議を開くこと連続三十九回、遂に會議の結論のようなものが出て来た。

その結論というのは、次の二つであつた。

金博士始末案件

(一) 王水險博士を擁立し、金博士を牽制するとともに、必要に応じて、金博士をおびき出すこと。

(二) あらゆる好餌を用意して、某国大使館の始末機關の借用方に成功し、その上にて該機關を用いて金博士を始末すること。

ここに王水險博士というのは、この程、ソヴェトから帰つて来た近代に稀まれなる科学的天才といわれる大学者で、しかも彼は、昔金博士を教えたことがあり、つまり金博士の先生だから、大博士であろうというので、王水險博士の力を借りる計画を樹たてたのである。

それからまた、某国大使館の始末機関というのは、この間新聞にも報道されたから御承知でもあろうが、要するに始末機関とは、人間を始末する機関のことであつて、普通われわれの目に日常触れる始末機関を例にとるならば、かの火葬炉の如きは、正まさしく始末機関の一つである。

どこをどう遣やり繰くつたか、とにかく金博士始末計画がうまく軌道きどう

にのつて動きだしたのは、その年の秋も暮れ、急に寒い北西風がちまた巷を吹きだした頃のことである。

その頃、金博士の許へ、差出人さしだしにんの署名のない一通の部厚い書面が届いた。博士が封を切つて中を読んでみると、巻紙の上には情緒纏綿じょうちよてんめんたる美辞びじが連なつて居り、切せつに貴郎あなたのお出いでを待つと結んで、最後に大博士王水險上じょうと初めて差出人の名が出て来た。

「あらなつかしや王水險大先生！」

と、金博士は俄にわかに容かたちを改めて、その風変りな書面を押し戴いたいたことだった。

「——ぜひ、わが任地にんちに來れ。大きな声ではいえないが、わしも近いうちに、大使館を馘くびになるのう。わしがほんやくたいかん翻譯大監と

して威張いばつとるうちに、ぜひ来て下されや」

と、王水険博士は、大秘密を洩もらして居られる。金博士にしては、かねがねその土地の風光のいいことも聞いていたので、一度はいつてみたいと思つていた。そこへ旧師からの誘さそいである。大先生の尊そん顔がんも久々ひさびさにて拝おがみたいし、旁かたがた々々の土地を見物させて貰うことにしようかと、師恩しおんに篤あつき金博士は大いに心を動かしたのであつた。

かくて博士は、出発の肚はらを決めた。いよいよ上海を出発したが、それから一週間の後のことであつた。出発日までの一週間を、博士は出発の用意に専念した。すなわち、わざわざ大きなトランクを三つ、自製し、そのトランクの中へ、これまた博士自製のこ

まごましたものをいろいろと詰めこんだ。まことに手数のかかった出発準備であった。私たちが旅行するときには、デパートへ行ってファイバーのトランクを一つ買い、あとはテンセンスストアで、一つ十銭の歯ブラッシや雲脂ふけと取り香水や時間表や蚤取のみとり粉などを買い集めてそのトランクの中に叩きこんで出かける手軽さとは、正に天地霄壤てんちしやうじやうの差があつた。

さあ、金博士の後を、われわれは紙と鉛筆とを持って追いかけることにしよう。

最初金博士は、三つのトランクを担かついで飛行場へ駆けつけたが、直ちに断きわられてしまった。

「まことにお気の毒ですが、こんな重い大きな荷物は、会社の飛行機には乗りませんので……」

「大きいけれど、そんなに重くはないよ」

「……それに御行先おゆきさきの方面は只今気流がたいへん悪うございましてエヤポケットがナ……それにもう一つ残念ながら御行先の方の定期航路は一昨日おととい以来当分のうち休航ということになりましたので……それに……」

「ああ、もうよろしい」

金博士は、サービス係の言葉を押し止め、

「何かこう、古くて役に立たない飛行機があつたら、一つ売って貰いたいものじゃが、どうじやろう」

「古くて、役に立たない飛行機といいますと」

「つまり、翼よくが破れているとか、プロペラの端はしが欠かけているとか、座席の下に穴が明いとるとか、そういうボロ飛行機でよいのじゃ。兎とに角かく、見たところ飛行機の型をして居り、申訳でいいから、エンジンもついて居り、プロペラの恰好をしたものがついて居ればいいのだ」

「そういう飛行機をどうなさいますので……」

「なあに、わしが乗って、自分で飛ばすのじゃ」

「そんな飛行機が飛ぶ道理がありませんですよ」

「わしが乗れば、必ず飛ぶんだ。詳しいことを説明している暇はないがね、兎に角、そういう飛行機を売ってくれるか売ってくれないか、一体どっちだい」

「売ってさし上げても差^{さしつか}支えはないのでございますが、生憎^{あいにく}そんなボロ飛行機は只今ストツクになつて居りませんので……」

「無いのかい。そ、それを早くいえばいいんだ。この忙^{せわ}しいのに、だらだらとくそにもならん話をしてわしを引きつけて置いて……ほう、早く行かにや、大先生と約束の時間に、〇〇へ入市できないぞ」

博士は腕に嵌めた大きな時計を見、例の大きな三つのトランクを軽々と担ぐと、大急ぎで飛行場を出ていった。

後を見送ったサービス係は、長大息と共に小首をかしげ、「でも力のある老人じゃなあ。あの大きいトランクを、軽々と担いでいくとは……」

金博士の姿は、こんどは埠頭に現れた。幸いに八千噸ばかりの濠洲汽船が今出帆しようとしていたところなので、博士はこれ幸いと、船員をつき突ばして、無理やりに乗船して、サロンの中へ陣取った。

「もしもし、どなたかしりませんが、もう船室がありませんので」事務長がこわい顔をして博士のところへやって来た。

「船室？ 船室はあるじゃないか。このとおり広い部屋があいているじゃないか」

「これはサロンでございまして、船室ではありません。御覧の通り、おやすみになるといたしましても、ベッドもありませんような次第です」

「いや、このソファの上に寝るから、心配しなさんな」

「それは困ります。では何とか船室を整理いたしまして、ベッドのある部屋を一つ作るでございましょう」

「何とでも勝手にしたまえ。わしは汽船に乗ったという名目めいもくさえつけばええのじゃ」

「え、名目と申しますと……」

「それは、こつちの話だ。ときにこの汽船は何時に〇〇港へ入る予定になつとるかね」

「はい、〇〇港入港は明後日みょうごにちの夕刻ゆうこくでございます」

「何じゃ明後日の夕刻？ ずいぶん遅いじゃないか。わしは、そんなに待つとられん」

「待つとられないと仰おっしゃ有つても、今更予定の時間をどうすることも出来ません」

「ああもうよろしい。わしは明みょう朝ちやうには〇〇港着と決めたから、もう何もいわんでよろしい」

「はあ、さいですか」

金博士のことを、船内では気が変でないと思わない者は、ひと

りもなかった。

3

金博士のために、第二二二号の船室が明^あけられた。

「これは至^{しごく}極覚えやすい船室番号じゃわい」

博士は、又ぞろ三つのトランクをひっさげてその部屋に移った。

ボーイが、そのトランクを持つとしたら、博士は奇^{きせい}声を発して叱^{しか}りつけたことだった。

間もなく夜となった。

そのうちに、船首でえらい騒ぎが起つた。^{へさぎ}舳で切り分ける波浪^{はろう}が、たいへん高くのぼつて、甲板^{かんばん}の船具を海へ持つていつて仕様がないというのであつた。そのうちに水夫が三名、船員が一名、その高い浪にさらわれて行方不明となつた。

舳で切り分ける波浪があまり高くて、そのために船員や船具がさらわれたと報告しても、知らないものは信用しなかつた。

「なにしろ波浪が、^{ほぼしら}檣の上まで高くあがるんだぜ」

「冗談いうない。どんな嵐のときだつて、舳から甲板の上へざつと上つてくるくらいだ。檣の上まで波浪が上るなどと、そんな馬鹿氣たことがあつてたまるかい」

「いや、その馬鹿氣たことが現げんに起っているんだから、全く馬鹿氣た話さ」

そんな騒ぎのうちに、船橋ブリッジでも秘ひそかなる大騒ぎが起っていた。

「どうも不思議だ。機関部は十五ノットの速力を出しているというが、実測じつそくするところの汽船は四十五ノットも出ているんだ」

「そうだ。たしかにそれくらいは出ているかもしれない。機関部の計器が狂っているのじゃないか」

「どうもあまり不思議だから、今機関部に命じてノットを零ゼロに下げさせているんだがね」

そのうちに機関部からは、機関の運転を中止したと報告があった。

「なに、機関の運転を中止したって、冗談じゃない。今現に実^{じつ}測^{そく}によると本船は四十ノットの快速力で走っているじゃないか」

「惰^{だり}力^{りよく}で走っているのじゃないですか」

「そうかしらん」

といっているうちに、実測速力計の針は、またまたぐいつと右へ跳^はねて、速力四十八ノットと殖^ふえて来た。

「いやだね。エンジンが停つて、速力が殖えるなんて、どうしたことだ。おれはもう運転士の免状を引き破ることに決めた」

「いや、俺は気が変になつたらしい」

「わしは、もう船長を辞職だ」

わいわいしているうちに、とつぜん大きな音響と共に、船体

はひどい衝動をうけ、ぐらぐらと大揺れに揺れたかと思うと、今度はぱったり動かなくなつた。

さあたいへん。頭が変だと思つていた船員たちは、周章あわてて跳ね起きると甲板へとびだした。

すると、何というべら棒な話であろう。汽船の前には、美しい花壇かたんがあつた。又汽船の後には道路があつて、自動車がひっきりかえつていた。右舷うげんを見れば、町であつた。左舷さげんを見ればこれも町であつた。これは変だ。やーい、海はどこへいった。

船員たちは、一同揃いも揃つてダブルで気が変になりそうであつたが、中に気の強い者もいて、本船の位置について鮮あざやかなる判定を下した。

「おい、何といつても、これは、わが汽船は〇〇港の陸上へのしあげたのだよ。ここは〇〇市だ」

「そんなべら棒な話があるかい。〇〇港なら、まだ二日のちじやないと入港できないんだ」

「馬鹿をいえ。お前たちの目にも、ここが〇〇市だつてえことが分るはずだ。ほら向うを見ろ。幾度もいつてお馴染みの木馬館もくばかんの塔があそこに見えるじやないか」

「ははん、こいつは不思議だ。あれはたしかに木馬館だ。するとやつぱり本当かな、わが汽船が〇〇市に乗りあげたというのは」

そんなことをいつているところへ、船室から金博士が現れた。

例の三つのトランクを軽々と担いで、舷ふなべりを越えて、花園へ下りよ

うとするから、船員がおどろいて博士の傍そばへ飛んでいった。

「そんなところから降りてはいけません。第一、まだ税関ぜいかんがや
つてこないのです。トランクの中を調べないと、上陸は不可能で
す」

「厄やっかい介なことを云うねえ。じゃ、今開けるから、お前ちよいと
見て置いて、後で税関へ見せるようどこかへ書いておいて貰おう。
さあ見てくれ」

そういつて金博士は、まるで箱師がトランクを開くような鮮あざやか
な速さで三つのトランクをぽんぽんぽんと開いてみせた。

「さあ見てくれ」

云い出したからには、事務長、勢いよく赴おもむくところ、何とも仕

方がなく、開かれたトランクの内容ないよう如何いかんと覗のぞきこんだ。が、途端けげんに怪訝けげんな面持で、

「もしお客さん。これは税金が相当かか懸かりますぞ。いいですか」
「税金なぞかかる筈はない。全部身のまわりの品物だ」

「そうともいえませんね。だって、身のまわり品である筈の洋服もシャツも齒ブラシも見当りませんですぞ。詰め込んでいるのは、ラジオの器械のようなものに、ペンチに針はり金がねに電池に、それから真空管しんくうかんにジャイロスコープに、それからその不思議なモートルにクランク・シャフトに発条はつじょう条じょうにリベットに高声器こうせいきに……」
「いくら数えてもきりがなから、もうよしたらどうじゃ。要するに右に述べたものは全部わしの身のまわり品だから、誤解して

貰つては困る」

「尤も、新品はないから、商品じゃないということとは分ります。ではよろしゅうございます。品名だけはノートして置きますが、まず此場このばは税金を懸けないで、お通り願うということにいたしましょう」

「ほう、漸ようやく話がわかつてきたね」

博士は、その場に引き散らかされた道具を一生けんめい掻かき集め、トランクの中に入れて、蓋ふたをした。そして軽々と肩に担いだのであった。

「ちよつと待ってください。何だか空からのトランクを担いでいられるように見えますね。どれ、ちよつと持たせてみせてください」

事務長がそのトランクをさげてみると、なるほど空のトランクのように軽い。

「はて、面妖めんような。あれだけ重い道具を入れて、こんなに軽いは、まるで手品みたいだ。お客さん、あなたは早いところ、あの道具類をトランクから抜いて、どこかへ隠してしまいましたね」

「冗談いっちゃ困るよ。あの身のまわり品はちゃんと中に入っているよ。ほら、このとおり……」

金博士は、わざわざ三つのトランクを、もう一度開いて事務長たちに見せてやった。

道具類は、ちゃんとぎっしり詰まっていた。

「おかしいな」

事務長は、その中から、小型のモーターを選んで、取り出した。「おや、このモーターの重さだけでも、トランクより重いくらいだ。すると、或る重いAなる物品を入れたトランクBの総重量AプラスBプラスアルファは、元のAよりも軽い——というのは、どういう算術になるのかしらん。どうも式が成立たんように思うが」

「おい事務長さん。お前さんは中学校で算術の点が優か秀だったらしいね」

と博士はいつて、

「だが、わしのトランクに関するかぎり、そのような純真な算術は成り立たないのだよ。忙しいから説明をしていられないが、

しかしこれは事実なんだ。つまり、AはAプラスBプラスアルファよりも大なりという場合が有り得るんだ。この解法がお前さんに分つたら、お前さんに人造モルモットを一匹、褒美ほうびにあげてもいいよ」

「へえ、そうですね。しかし私には、とても分りません。なんとか今、説明していつてください」

「そうかね、聞きたいかね。それじゃちよつと説明しようかね」
先を急ぐ筈の金博士は、そこで急にのんびり腰を据すえてしまつて、

「いいかね。ここにABCDEなる五つの部分品があつたとする。いずれも、重さは十キロずつとして、合計五十キロの重さのもの

だったとする」

「はい、その算術は分ります」

「ところが、そのA B C D Eの部品を一処にして測ると、はか総重量がたった二十キロしかないんだ」

「そこがどうも分りませんなあ。一つ十キロのものが五個あれば、どんな場合でも総量は五十キロです」

「ところが、それが何とかの浅ましきというやつなんだ。いいかね。A B C D Eの部品をばらばらにして置いて一々測ると総計五十キロある。これはよろしい。その部品を組合わせて測ると、これがなんと二十キロになる——という場合は、只一つある。それは、その部分品で組立てた器械が、じゆうりよくだしようき重力打消器であった

場合だ」

「え、重力打消器というと……」

「つまり、重さの源である重力を打消す器械のことを、重力打消器というのだ。つまり五十キロの部分品から成るその重力打消器は、組立てられることによつて、三十キロの重力を打消す性能のものだったんだ。だから五十キロ引く三十キロで、残りは二十キロと出る。どうだこの算術は間違いなしによく分るだろう」

「うへーッ、こいつは愕おどろきましたな」

と、事務長は目を丸くして、

「それで何ですか、貴下のお持ちになっている三つのトランクの内容物は、いずれも重力打消器の全部分品なんですか。で、何で

まあ重力打消器を三つも、ぶら下げて歩かれるのですか」

「折角せつかくだが、お前さんの想像力は、すこしばかり弱いよ。わし

のトランクの中に入っている身のまわり品は、必要とあれば重力

打消器を組立てることも出来るし、また必要とあらば、ラジオ送そ

受信機うじゅしんきとしても組立てられるし、又或る場合には兵器——いや

ナニムニヤムニヤムニヤ——で、つまりその又或る場合には、啣ポ

筒ンブみたいなものにも組立てられるのだ。どうだ、魂消たまげたか」

「へー、さいですか。こいつはいよいよ愕おどろきましたな。そしてお

話を伺うかがっていると、そのトランクがだんだん欲しくなってきました

だが、いかがですか、その一つを私にお分け下さるわけには……」

「いや、それはまたこの次のことにしましょう。わしは今度は急用でこの〇〇港にやってきたのでな。商談は、またこの次の機会ということに願います」

そういつて、博士は、重力打消器が入っているトランクを軽々と肩にのせて、歩きだした。すると、何思い出したか、事務長がまた追いかけて来て、

「もし、お客さんへ。もう一つ、伺^{うかが}いたいことがあるのです。ち

よつとお待ちを……」

「ええい、よく停める男だね。もういい加減かげんに放してください」

「私のもう一つ伺いたいことは、この汽船が、機関部とは無関係なすばらしい快速を出して〇〇市に乗り上げてしまいました、あの快速ぶりは、お客さんがそこにお持ちのトランクの内容品と、何か関連があるのですかな」

「ああ、そのことか」

博士は、そこに立ち停つて、

「それは大いに関係ありじや。わしが乗らなきや、ああは快速が出るものか。あれはつまり、わしが船室内で、このトランクの中に入っている部分品を組合わせて、一つの強力動力装置きょうりよくどうりよくそうち」

を作ったんじや。そしてそれを動かしたもんだから、それであるように、二日半もかかるところを一日で来たんじや」

「へえ、やっぱり、さいでしたか」

「実は、わしのあの器械を使えば、汽船もいらぬし、飛行機もなくて、ちゃんと快速旅行が出来るのだ。しかしそれをやると、世間の眼についていかんのじや。じやによつて、わしは何か尤ももつとらしくした乗物に乗ることになっている。それに乗った上で、わしはわしの都合により、あの強力動力装置を組立ててそれを動かし、ちよつと一ひねりやつても、あのような汽船としては快速の部に入る速力を出せるのじや。どうじや、もうその辺でよろしかろう」

金博士は、庶しよみん民階級がすきだと見えて、いつになく短気を出

さず、じゅんじゅん 淳々として丘へあがった船上で、つうぞくこうえん 通俗講演をくさりぶつたのであつた。

「ああそうそう。某国大使館というのは、どこですかねえ」
こんどは金博士の方が声をかけた。

「某国大使館なら、ほら、向うの山の麓ふもとに、塔の上にきれいな旗がひらひらしている城のような建物がありましよう。あれが某国大使館です。しかしお客さん？ あなた、あそこへお出でになるのでしたら、おやめになるようおすすめします」

「そりや何故かね」

「何故って、あの大使館は当時評判がよろしくないので……。過
去一年間に、あの大使館をくぐった者は、総計七千七百七十七人

です。ところがあの門を出て来たものがたった四千四百四十四人なんです。不思議じゃありませんか」

「別に不思議とは思われんがのう。算術をすると、すぐ答が出るじゃないか。七千七百七十七人マイナス四千四百四十四人イコール三千三百三十三人と御明算ごめいさんが出る。すなわちこの人数たるや、某国大使館内に現に寝泊りしている館員の数である。どうじゃ、簡単な算術ではないか」

「いえ、そうじゃないんで……。あの大使館員は、実数わずかに三百三十二名なんですぞ」

「たった三百三十二名」

「そうです。すなわち、もう一度引き算をいたしまして、三千三

百三十三名から引くの三百三十二名は三千一名と答が出来まして、この三千一名なる人間が、奇怪にもあの某国大使館に入ったきり、出ても参らず、館内に生活もして居らずという無理数的存在なんです。ですからお客さんも、その無理数の中にお加わりになりませんようにと御注意申上げますような次第で、へい」

「いや、よく分りましたわい。しかしわが金博士に限って、心配は無用でござる。では、さらばさらば」

と、金博士は事務長に挨拶すると、舷をまたいで、傾斜した船側の^{んそく}上を滑り^{すべ}台の^{だい}ように滑って、どさりと百花咲き乱れる花壇の真中に、トランク^{もろとも}諸共^{しりもち}尻餅をついたのであった。

なにがさて、気の短い金博士のことであるから、身の危険も、相手方の思惑おもわくも考えないで、その足でつかつかと某国大使館の玄関から押し入ったものである。

「大先生だいせんせいは居られぬか。王水險おうすいけん大先生のお部屋はどこであるか。只今金博士が推参すいさんいたしましたぞ」

とうとう王水險大先生が朝寝坊の居間が、金博士みずか自らの搜索そうさくによって発見せられた。

「やややや、お前は金か。お前の来るのは、まだ二三日先だと思つて油断をしていたが、やややや、もう来たか」

王大先生は、喜ぶより前に、おどろか愕き且つあき呆れてしまった。

「大先生、おなつかしゆうございますな。ところで、この某国大使館では近々先生のくびき鹹るといふ話を御書面で承知しましたが、けしからんですなあ。私がこれから某国大使に会いまして、それを思い停らせましょう」

「いやなに、それには及ばないよ。どうせ仕方がないのだもの」
「仕方ないなどと、今の積極せつきよく時代じだいに引込んで居られることはありません。私が大使に強談判こわだんぱんをして……」

「いや、そんなことをしても無駄じゃ。わしが鹹くびになるだけでは

なく、大使自身も鹹になるのだ。大使ばかりではない。参事官さんじかんも書記生しよきせいも語学将校も園えんてい丁もコツクも、みんな鹹になるのじや」

「はて、それは一体どういうわけ……」

「早くいえば、この大使館の本国が亡びるのじや。ドイツ軍は、もう間近まぢかに迫っている。だからこの某国大使館も解散ほかの外ないのである」

「はあ、そんなことでしたか。しかしこれだけ立派な建物を空きあ家やにするのは惜しい。大先生、私この建物を買つてもいいですよ。全まったく惜しいものだ」

と、金博士はあたりをきよるきよると見廻す。そのときベッド

の下から大先生の袖を引く者があつた。

「おツ」

その怪しげなる袖引き人間は、外でもなく油断をしてここにベツドを並べてししゆくちゆう止宿中のしようかいせき醬買石委員長であつたのである。

「……金博士に見つかればたいへんです。私を窓から逃がして下さい」

醬は泣き声になつて、王大先生にささや囁く。

「よろしい、わしの手を見て、早いところをやれ」

と大先生はベッドの下と連絡をとつて、やおら金博士の方へ向きき、

「天てんじよう井いのあそこにある彫刻な、あれは中々古いもので、純じゆん

金^{きん}だよ。よつく御覽！」

「へえ、あれがね」

金博士を向く、王大先生はお尻のところ^はで手を振る。とたんに硝子窓^{ガラスまど}が大きな音をたてて跳ねかえった。

「あ、あれは何の音？」

金博士の顔が、さつと緊張した。

「あははは、今のは猫がとび出したのじゃ」

「あれで猫ですか。へえ、おどろきましたな。○○の猫は、ずいぶん大きくて人間ぐらいの大きさがあると見えますなあ」

金博士は、大真面目^{おおまじめ}でいった。

窓からとびだした醬は、そのとき運悪く柅^{ひいらぎ}の木の枝にひっつか

り、顔も手足も血だらけにして齒をくいしばっていたが、金博士の声を耳にしてびっくり仰ぎょうてん天、狼ろうばい狽する途とたん端に、すとーんと地面へ落ちて、いやというほど腰をうちつけた。それでも彼は助かりたい一心で、膾おつとせい膈獣の如く両手で匍はつて、そこを逃げだした。

「とにかく金よ、お前も長ちようと途の旅行で疲れたろう。この寢室を貸してあげるから、ゆつくりひと寝入りしなさい。その間に、われわれは万ばんたん端の用意を整ととのえることにするから」

「はあ、大先生、お構い下さいますな。どうぞ大袈裟おおげさな用意などなさらぬように……」

「まあいい、この部屋は静かだから、よく睡れるだろう。では、

おやすみ。ゆうごく夕刻になったら起してやろう」

「はあ、おそ恐れ入ります」

王水險先生は、自室を金博士に譲つて、そこを出ていった。そして戸口を出るとき、そつと外から鍵をかけることを忘れなかつた。こうして金博士を缶詰にして置いて、遅まきながら万端の用意にかかれれば夕方までにはこの大使館の始末機関はすぐ使えるようになるだろう。

そんなことを考えながら廊下を歩いていると、後から呼ぶ者があつた。それは余人よじんではなく、松葉杖まつばづえをついた醬だつた。

「おや、お前、足をやられたか」

「はあ、柵の樹から落ちたものですから。ところで大先生、あい

つは何をしていますか」

「ああ金のことか。金は今わたしたちの部屋で旅の疲れを癒すため、いとぬい一寝入りさせているよ。実は早いところ空气中に睡眠薬をまいて置いたから、金のやつはもう二十分のちには両の瞼がくつついて、それからあと正味しょうみ六時間は、死んだようになってぐうぐう睡ることだろう」

「ああそうですか。それは手間てまが省けていい。じゃあこの大使館の始末を借りるまでもなく、余自らが彼の寝室に忍びこみ、余自らの青竜せいりゆうとう刀を以て、余自らが彼の首をはねてしましましょう」

「そうするか。わしのためには、可愛い弟子だったが、悪みせに魅なみだられた今となっては、涙なみだをふるって首を斬ることにするか。おお

もう四十分経った。金のやつ、ぐっすり寝こんでいる頃じゃ」

醬にうまくいくるめられている王水険大先生は、最高の善事ぜんじをするつもりで、醬を引具ひきぐし、窓下に高梯子たかばしごをかけ、それをよじ登って、窓からそつと金博士の様子を窺うかがったのである。

ところが、寝台は空からであつた。もう一つの寝台も空であつた。

「おや、金のやつ、さては逃げたな」

とうとう取逃がしたかと、残念そうに両人が室内を睨にらんでいると、ふと目についた物がある。それは一台の小型タンクであつた。

「ありや、あんなどころに、変なものがあるぞ」

「小型タンクなど、誰が持って来たのでしょうか」

両人は、不思議に思つて、窓から忍びこむと、部屋の真中に置

かれてあるタンクに近づいた。

そのタンクは、扉を開こうとしても開かなかつた。ただタンクの上に貼紙がしてあつた。

「午後四時までこの中^{うち}にて熟^{じゆくすい}睡する故、何者もわが熟睡^{さまた}を妨ぐるなかれ。金博士」

と書いてあつた。金博士は、このタンクの中に睡っているのか。そういえばなるほど、どこからか、大きな鼾^{いびき}が聞えてくる。

醬と王水險大先生とは、さすがにタンクには手が出しかねて、さすが退却のほかなかつた。だが御兩人とも、まさかこの小型タンクが例の金博士の三個のトランクによつて構築されたものだとは気がつくまい。金博士の鼾の音は、このとき一段と高くなつ

た。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第10巻」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1941（昭和16）年10月号

※「四谷怪談」における「伊右衛門」の妻は、「民谷岩」とされ
ます。「居谷岩子女史《おいわさん》」と「民谷岩」の關係に疑
問が残ったので、当該箇所にもママ注記を付しました。

入力：tatsuki

校正：まや

2005年5月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

戦時旅行靴

—金博士シリーズ・6—

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 海野十三

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>